

高校生におもてなし講義

元客室乗務員 「世界に通じるマナー」



マイクを手に正しい握手の仕方について実演する江上さん



2020年の東京五輪・

パラリンピックに向け、おもてなしの精神を身につける講座が、県内の高校でも開催されている。大会成功の鍵を握る一つがボランティア。3年後に10代後半から20代前半となる今の生徒たちの力が期待されている。

小美玉市にある県立中央高校のホールで今月7日に開かれた「おもてなし講座」。日本航空の元客室乗務員で、筑波大客員教授の江上いずみさん(55)が、旅客機内で接客した長年の経

験を踏まえ、スポーツ科学コースの生徒約80人に国際的なマナーやコミュニケーションの取り方を教えた。

適切な身だしなみやおしぼりの出し方、握手やお辞儀の仕方を身ぶり手ぶりで示す江上さん。「相手に喜んでもらうために心を尽くす。対価や見返りを求めない気持ちは何よりも大切です」と呼びかけた。

五輪・パラリンピックでは、競技会場や選手村、空港や主要駅などで大勢のボランティアが動員されている。例えば、12年のロンドン大会は、約7万8000人がボランティアに参加したとされている。

東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会は、9万人以上が必要だと想定。その中心を担う立場として期待されるのが、3年後に大学生の年齢になる現在の高校生たちだ。

選手を応援しに訪れる大

勢の外国人旅行者をどのような気持ちと振る舞いでおもてなしをするか。江上さんは「グローバルマナーを身につけておくことがとても大事」と講座の意義を強調した。1年生の川崎千桜さん(16)は「知っているつもりで間違っているマナーも多かった。五輪ではボランティアとして参加したいので、学んだことを生かしたい」と話した。